

2017 年 11 月 14 日

広島大学長選考会議長 御中

広島大学教職員組合  
執行委員長 坂元国望

## 「広島大学長再任」に関する意見聴取 中間報告

### 1. 調査の概要

現学長に対する構成員の評価と学長再任における意向投票の必要性の2つに焦点を絞り、教職員組合 HP 上でのアンケート調査を実施しました。

### 2. 調査期間

平成 29 年 11 月 6 日(月)～20 日(月)

上記調査期間のうち、11 月 11 日(土)までの回答を中間報告とし、ご報告致します。

### 3. 調査の告知方法

- (1) 各部局組合掲示板へのポスター掲示
- (2) 組合員メーリングリストによる呼び掛け(対象：約 530 名)

### 4. 回収数

37 名(教員 33 名・職員 4 名)

告知から 1 週間という非常に短期間であったにもかかわらず、37 名から回答を得ることができました。

## 回答者の属性

### 1. 性別

男性：29 名 女性：8 名

### 2. 職種

|                 |        |
|-----------------|--------|
| 教員(教授・准教授・講師)   | : 28 名 |
| 教員(助教・助手)       | : 3 名  |
| 教員(附属学校園教諭・その他) | : 2 名  |
| 常勤職員            | : 2 名  |
| 契約職員            | : 2 名  |

### 3. 年齢層

20 代：1 名  
30 代：1 名  
40 代：18 名  
50 代：14 名  
60 代：3 名

#### 4. 組合加入

組合に加入している：27 名

加入していない：10 名

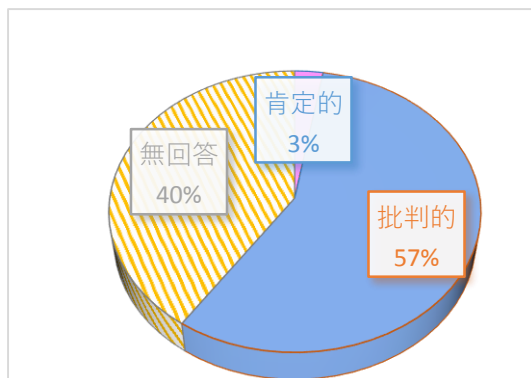
#### 5. 意向投票権有無

投票権あり：29 名

投票権なし：8 名

### <質問 1>

現学長が就任以来 2 年半の間に行ってきたことに対する、あなたの評価をお聞かせください。



現学長の業績を積極的に評価する意見は、全体の 3% 弱に留まりました。

多くが消極的・批判的な意見、あるいは無回答を占めました。トップダウンに対する批判、それに伴う現場の疲弊状況や士気の低下、広島大学のプレゼンスに関わる指摘、学長の経営判断に対する意見が寄せられました。

### 【肯定的な意見】

(1) 80 点 (※本回答は、点数のみの記述)

### 【トップダウンに対する批判】

- (1) 大学改革と称して様々な事案をトップダウン方式で打ち出し、大学構成員の理解や賛同もなく強行している。
- (2) 現学長の行動力と実行力は顕著であり、量的実績においては評価される。しかし、全学的な合意形成のための企画力と調整力においては極めて不十分である。学術・教育機関としての質の実績では、むしろ厳しい評価となる。また、大学運営に関しては強引かつ豪腕の排りを免れない。教育機関である大学の長として、総合的には不適格の評価である。
- (3) 文科省の意向を反映したトップダウン的な大学改革に力を発揮していると思います。民主的でアカデミックな組織としての大学を制度的にも実質的にも破壊し、企業的な財務中心経営からはじき出した目標設定と、それを実行するためのトップによる独裁的で迅速な運営を可能にした点も、その実行力は評価されて良いと感じます。学長本人がやたらと目立ちたがる点は傍目に恥ずかしい気もしますが、自己を犠牲にしても客寄せパンダになろうという点は評価されるべきでしょう。ただ、自身の思いつきのようなアイディアで学内を振り回すことが多く、それによって教職員の余計な仕事、雑務を増やしていることは問題であると感じます。教職員や学生という大学構成員よりも、対外的な評価を中心に据えた施策によって内部の疲弊と執行部へのあきらめ感をもたらしている点は非常に問題ですが、逆説的に危機感と構成員の一体感を醸成している点もあると思います。いずれにせよ現学長のもとの 2 年半で、短期的には大学に大きな変化をもたらし、新たな風を感じさせた点は疑いようがないが、大学の終わりの始まりを感じさせる 2 年半であるとも評価できるでしょう。
- (4) SGU の政策をトップダウンで押し進めた結果、部局の現場が求めている専門性と必ずしも一致しない、准教授の教授採用への 5 年以内の英語論文作成の基準が求められた。また、部局の運営で不可欠な退職者のポストへの補充人事が認められない事態が多く、部局で生

まれている。大学の部局で行われている教育と研究は必ずしも SGU 路線で推奨されている専門に限るわけではない。このような部局の現場が求めているニーズを吸い上げず、執行部が決めた SGU 路線の数値目標達成をトップダウンで押し進めてきた現学長の 2 年半の大学運営に対して激しい憤りを感じる。

- (5) 現場の意向を無視したトップダウン型の改革を、メリット／デメリットの十分な検討もないまま早急に進めており、構成員を疲弊させている。肯定的に評価することはできない。
- (6) ガバナンス強化の旗のもとに専制的な感じを強く受けています。正直なところ、自分としては評価を高くすることはできないと思います。

#### **【現場の疲弊や士気の低下を訴える意見】**

- (1) 現場の教職員は、膨大なエネルギーと時間をその対応に追われて消費している。教員は、本務の教育活動と研究活動に費やすエネルギーと時間を奪われている。
- (2) この二年半の混乱で現場は本当に疲弊してしまっている。これまで実直に地道に現場を支えてきた教員ほどそうである。しかしこのようなアンケートの機会でもなければ、表面上の数字からは分からない。このような実情が伝わる機会はほとんどない。もはや将来にまったく希望が持てない。
- (3) 無理な施策も多い中、人事の停滞もあり、消滅しつつある学問分野が出てきている。広大はもはや魅力的な職場でないと感じる人も多く、今後、優秀な人材が出て行ってしまうのではないかと懸念される。
- (4) 学長が何か行動あるいは発言する度に、現場の士気が下がる 2 年半でした。現在の広島大学の改革方針の是非はともあれ、リーダーとして不適格であると考えています。
- (5) 従業員の士気を下げること成功している。
- (6) 若手教員への配慮が不十分だと思う。昇任人事をなくしたことで、せっかく有能な若手を採用しても、広島大学に愛着心がわかず、流失していく。間の抜けた対応としか思えない。科研の若手研究では年齢制限を廃止したのに、今年から始まった学長科研は、未だに年齢制限を行い、採用時にその年齢を超えている若手教員にはエントリーすら出来ない。対応が後手後手で、現場の実情を十分にくみ取っていない。学長が任命した人事委員会委員長にも、対応に疑問が残る。各部局からの人事要求に対して、人事委員会が下した判断の理由説明がなく、各部局には大いに不満が高まっている。この点で、学長のガバナンスに対して、大いに疑問を感じる。人を見る目を、本当にお持ちなのだろうか。

#### **【広島大学のプレゼンスの低下、将来像に対する不安】**

- (1) 各種の世界大学ランキングでは世界的にも国内的にもランクが下降し続けている点が、学長の評価を如実に表していると思う。本など出版している場合ではない・・・
- (2) 短期目標にこだわりすぎ、長期的な姿が見えていない。100 年後に輝く大学を求めるのならば、100 年後のための投資をすべきだ。
- (3) 様々な活動を行っているのに、一括した評価が難しいです。問題点を指摘すると、大学の構造、すなわち誰が本部のどこで何を決めているのか、不明になってきている。その上、学術院を作ったことにより、組織がより複雑化した。  
構造の複雑化によって、事務の労働負担が非常に増えています。一方、常勤の事務職員員を減らして契約職員を増やし、しかも契約職員も 5 年任期になったため、事務組織の運営が極めて困難になっている。  
人事をまとめて全学で調整することが重要だということを理解しているが、実際には人事手続きに時間がかかりすぎている。その上、人事委員会の委員が公開されておらず、極めて不透明である。大学全体の予算削減を理由に様々なところで予算と人材を減らす現状を少しでも回復させる努力をしてほしい。文部科学省と社会に対して国立大学法人はなぜ重要なのか、予算削減では海外の大学と競争できなくなり将来が危ういことを、強くアピールすべきです。
- (4) 現学長は、広島大学を世界大学ランキング 100 位以内にするという、非現実的な目標をかかげている。しかも、最近発表されたランキグンでは、むしろ順位が大きく下がっている。

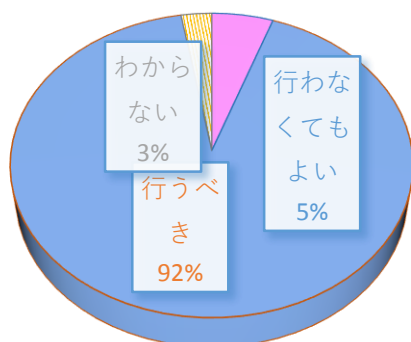
- この点について、結果責任をとるべきである。この点でも、再任は不適切である。
- (5) この2年半に行ったことは評価できない。就任以来、広島大学のプレゼンスは悪化の一途をたどっている。

#### 【学長の経営判断等に関する指摘】

- (1) 不適切な判断が多い。特殊事情のある医学部の発想や基準を、他の部局にまで及ぼそうとすることがまま見受けられた。学長は、全ての部局の事情に配慮するべきである。この点で、現学長は適任とは言えない。
- (2) 各学部にも固有の特徴、問題点についてよく勉強し、考慮してほしい。
- (3) 高級学長公用車の購入・本部棟の無駄な生け花・自動演奏ピアノなど無駄が多い(レクサス1台で学内のトイレの整備など、いろんなことが整備・改善できるはず)。気まぐれな行動、数々の品行が学長としてふさわしくない。学長として恥ずかしく、広島大学自体の品位を損ねる。
- (4) 本部棟2階のピアノと生花は、無駄な経費だと思います。
- (5) 貴重な財源を無意味に浪費し続けている：(例) 入学式におけるプロンプターの導入（高価と聞いている）、本部玄関の不必要な装飾（木の椅子に50万円、絵画額縁代に200万）、公用車としては不似合いなレクサスの購入（推定1500万円）、学長の顔が大写しの複数の新聞広告（100万程度か）、「広島大学はトップ100に～」大量購入（院生へ配布）、海外からの評価委員に対する法外な接待もあると聞いている。
- (6) 外面（派手なパフォーマンスが好き）>>> 内面：ホームカミングデーにもかかわらず、カープ優勝パレードを優先した。同窓会が嘆いている。
- (7) 学内を内側から良くしていこうとする向上心に欠け、ヒトの意見に耳を傾けようとしない傾向が顕著：学内のことを知ろうとしないくせに（海外ばかりに行く）何かと口をはさみ、余計な混乱を招いている。さらに、自分に批判的な教員職員を遠ざける。
- (8) 人材登用に問題がある：以前より種々の問題があった〇〇を学長主導で学術・社会連携室の教授として昇任させた上、2017年度学長表彰までしている。盗撮事件を引き起こした教員の直接の上司も幹部にしたという。人望のない教員を次々と幹部にしている。
- (9) 経営に無責任すぎる。〇〇や△△など(企業名等)と同じように見える。

#### <質問2>

2014年の学長選考規則改定により、学長の2期目は、学長選考会議はその学長業績評価の結果によっては意向投票を行わずに学長を再任することができるようになりましたが、今回、学長選考会議は意向投票を行わずに学長を再任する権限を行使するべきだと思いますか。あるいは学長選考会議による学長業績評価の結果に関わらず、その権限を行使せずに意向投票を行うべきだと思いますか。



「意向投票を行うべきである」と回答したのが92%と圧倒的多数を占めました。

「学長選考会議による業績審査の結果が良好であれば、意向投票を行わなくてもよい」と回答したのが5%、「わからない」としたのが3%でした。

**<質問 3> そのように考える理由を教えてください。**

**選択肢 1). 業績審査の結果に関わらず、意向投票を行うべきである。**

**【大学の自治、民主的運営を訴える意見】**

- (1) 学長は、大学の全構成員を代表して大学のために働く義務がある。そのことにより、権限（権力）が与えられているわけだから、大学の構成員の民意で選ばれることが基本である。たとえ、意向投票で最多得票をしたものが学長に選任されない事態があったとしても、その選挙結果を全構成員に公表することが、大学の自治を民主主義の本質を担っているから。
- (2) 学長選考は大学にとっての重大事であるばかりか、民主的な大学運営のためにも意向投票は必要不可欠なことだと考えるから。
- (3) 本学の改革が急速に進められている現在、学長の見識と指導力が厳しく問われるべきである。本学の理念実現に向けた学長の方針と見解を確認し、構成員の理解と協力が得られるために、意向投票は不可欠と考えられる。また、大学院再編とユニット制、全学人事委員会と教員個人評価など大学の根幹を成す組織と制度の改編について、構成員に賛否を問うためにも意向投票の実施が望まれる。
- (4) アンデルセンの「裸の王様」の童話が語るように、強力な権限を持つポストにつく人には、周辺に位置する職員や教員は本音で率直な評価を語ることはできない。現場で働く教員や職員の日常の仕事の実感から、現大学執行部への評価を聞くことのできる制度として、意向投票は重要な役割を果たしてきたし、今後も果たすと考える。こうした理由から、是非意向投票を実行すべきであると考えます。
- (5) 再任時に意向投票が行われなければ、8 年間の長期に亘って、大学構成員の意向を直接聞く機会がないこととなる。大学を取りまく内外の環境の変化の激しい中、長期間に亘って大学構成員の意思の反映がない形で学長の任期が続くことは、かえって学長に対する大学構成員の信頼を失わせ、リーダーシップの正統性の基盤を崩すことになる。
- (6) このグローバル時代の組織のトップであれば、構成員に対してもアカウンタビリティを果たし、また任期満了時にその信を問う投票を行うのは当然で、それを行わないというのは時代に逆行している。また衆院選や知事選などの選挙時にはキャンパス内に期日前投票所まで設けて学生に投票を促しているのに、大学自身がトップに関する選挙を行わないというのは、学生にも示しがつかず教育上も良くない。オープンでフェアな投票を実施すべきで、その結果も透明性確保の観点から公開すべきである。
- (7) 大学は民主制の担い手を育てる場であり、利益を求める民間企業とは異なる。その代表の選出に関して、少なくとも構成員の意向投票は実施されるべきであるし、その結果も公表されるべきである。
- (8) 学長は大学を代表する立場ですので、構成員の信頼を得た上で勤務するべきです。信頼を得る自信がない方は学長になるべきではありません。
- (9) 教職員に支持されている学長でなければ、組織はどの方向を目指すにせよ、まともに動かないと思うので、教職員の意向を問うことは必要である。
- (10) 投票抜きの選考ならば、信任をえたとはいえないため。
- (11) 大学の自治を少しは取り入れるべきである。
- (12) 意向投票なしの再任は学内民主主義に反する。
- (13) 構成員の意見が全く反映されない現システムはおかしい。
- (14) そもそも、2014 年の意向投票において構成員からの支持がなかったのに、学長になった。そして、広島大学の構成員は以前よりも遣り甲斐のない環境に陥っているし、かえって笑いものにされている。ここで、意向投票を行い、全構成員の意思を認識することが非常に重要である。
- (15) 構成員の意見を証拠として残すべきである。

#### 【学長選考会議の適切な判断を求める意見】

- (1) 学長選考会議が現在の学長に対し批判的な評価をするとは思えない。出来レースになる可能性が高いと思われる。
- (2) 学長選考会議のメンバーを学長自身が選んだり承認したりしたのであれば、そもそもその組織による評価自体がナンセンス。投票権を持つ人が限定される「意向投票」でなく、全構成員による「選挙」を行うべきである。
- (3) 学長が選考会議メンバーを支配してしまっている。
- (4) 少数の学長選考会議議員による議論だけでは大学構成員の意向が反映されない懸念がある。
- (5) 学長の業績評価方針がクリアでない、密室で決まってしまうため。
- (6) 学長選考会議は、学内の意見や動向を十分に把握しているとは言い難い。意向投票は、その判断の重要な要素の一つになり得る。
- (7) 国立大は、私学ではない。つまり、経営だけでなく、教育研究を日本国のためにする組織であり、それを客観的に評価するには経営会議のみでは評価できる陣容ではない。
- (8) たとえ大学構成員が学長を直接選出できない状況であっても、大学構成員の意向を、別ルートで選出される学長であっても認識して、ガバナンスを発揮して頂きたい。謙虚さが、学長には必要であると思うから。

#### 【正当な業績評価に対する懸念他】

- (1) 業績審査は数字だけで判断されるものではなく、多角的な視点からの判断が必要。より多くの意見を集約するためにも意向投票は必要。
- (2) 大学構成員の信任を得られているような業績を上げているかどうか投票等で直接評価されるべき。
- (3) 業績については学長一人の手柄ではない。教職員が努力した賜物である。職員に評価を問うべきである。

#### 選択肢2). 学長選考会議による業績審査の結果が良好であれば、意向投票を行わなくてよい。

- (1) 不要な選挙は、費用、時間の浪費である。
- (2) 忙しい先生方の時間を節約するため。

#### 選択肢3). わからない。

- (1) そもそも、意向投票1位になった人が学長として選出されるのではなく、閉じられた学長選考会議で決まってしまうことがおかしい。意向投票1位になった人が、学長になってはいけないしかるべき理由を学長選考会議が提示しない限り、1位の人が学長になるべきではないのでしょうか？よって、2期目も意向投票を行ったとしても、その結果が反映されないのであれば、意向投票は意味がないと考えます。

以 上